

『異説・志慶真乙樽』

2019年9月9日改訂
2016年1月7日初稿

陸奥賢



脚本『異説・志慶真乙樽』はクリエイティブ・コモンズによって許諾されています。これは原作者のクレジット（脚本：陸奥賢、作品タイトル：『異説・志慶真乙樽』）を表示することを主な条件とし、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可される最も自由度の高いCCライセンスです。

【登場人物とあらすじ】

①祝女 今帰仁御神（なちじんうかみ）

志慶真乙樽と攀安知の娘・・・13年間、北王朝の王妃として育てられる。しかし、じつは乙樽と本部平原との不倫でできた娘。本編（北山滅亡の歴史）を物語るのは彼女。俗名は乙鶴（おとづる）。現在は盲目（生まれたときには目が見えていた。北山が滅亡するときに、母・乙樽に眼をつぶされる）。

②祝女 志慶真乙樽（しげまうとうだる）

今帰仁御神の母。志慶真村の美女。一般人の娘であったが、祝女・樽金のおつきの者として仕える。ある日、樽金の命令でイラブ（海蛇）を捕りにやられ、そのときに若き本部平原に犯される。そのショックで盲目となるが、祝女（ノロ）となり、今帰仁城で祭祀を司る。その様子を見た攀安知王が一目ぼれし、召し抱えられる。

※史実では、王とのあいだに長く子供ができなかったが、9年目によく子供ができ、そのことを祝う「今帰仁（なちじん）の城（ぐすく）、霜しもないぬ九年母（くにぶ） 志慶真乙樽が ぬちゃいはちやい」の歌が残っている。北山王滅亡と同時に死んだと思われるが、生き残って「今帰仁御神（なちじんうかみ）」という最高の祝女になった...という乙樽伝説もある。

③第三代怕尼芝（はねじ）王 攀安知（はんあんち）

北山王。今帰仁城に祭祀にきていた祝女・乙樽を見て呼び寄せる。盲目になった謂れ（男に犯されて、ショックで失明したこと）を聞いて、憐み、妃として迎えて愛す。本部平原を見つけたし、北山一の武将として育て上げ、片腕として重宝する。

※史実では、生年不肖、没年は1416年（永樂14年）。琉球の山北国・怕尼芝（はねじ）王統最後の王（在位・・・1396年・洪武29年～1416年・永樂14年）。先代の珉の長男である。『中山世鑑』や『中山世譜』には「武芸絶倫」で「淫虐無道」と記されている。『明史』に計14回の朝貢の記録が見えるが、中山王に比べて頻度が低く、北山の劣勢がうかがえる。1416年に台頭する佐敷の尚思紹（シヨウシシヨウ）、尚巴志（シヨウハシ）親子と戦う。臣下の本部平原の裏切りもあり、居城の今帰仁城にて自刃した。攀安知は「千代金丸」（国宝）とよばれる譜代相伝の宝刀を持っていたが、没後、尚氏の手に入った。

④本部平原（もとぶへい）

攀安知の配下の武将。若い頃は荒くれ者で乙樽を犯す。その後、攀安知に見いだされ、北山第一の武将となった。中山王（尚親子）の進撃を何度も追い返す。進撃のさいに祝女・乙樽による儀式が行われ、そこで再会し、揉めるが、また乙樽を犯し、口封じをする。そのうち乙樽を愛し、不倫関係が続く。やがて乙樽は平原の子供（乙鶴）を妊娠して出産するが、乙樽と自分の娘であることを隠しながら、奇妙な三角関係のまま13年間の平和な時代が続く。しかし、やがて「乙鶴は王の娘ではなく、平原の娘である」という妙な噂が広まり、破局を迎える...

※史実では尚親子の策略に嵌って攀安知を裏切り、しかし逆に殺害されてしまう。

⑤祝女 樽金（たるかね）

志慶真乙樽の師匠。いきなり一般人の娘であった乙樽に、祝女だけが捕ることを許されたイラブ（海蛇）を捕りにいけと無茶な命令を下す。その夜、乙樽は若き日の平原に犯される。

⑥祝女 千代(ちよ)

今帰仁御神に仕える祝女。13歳。本編は千代が御神に「どうしてノロになったのですか？」と尋ね、それに答える形で進められる。

【衣装イメージ／物語の舞台】

※画像は琉球の祝女の装束。



※今帰仁城跡(世界遺産認定)



今帰仁御神が舞台中央に腰かけている。御神は白装束。杖。盲目（劇中ずっと目を閉じたまま）。そこに千代が「なぜ御神さまはノロになったのですか？」と尋ねてくる。御神の独白が始まる……

御神「千代よ。千代よ。なぜわたしがノロになったのか？聞きたいというのかい？そうかい。そうかい。それでは、少し長くなるかも知れないが、ひとつ、昔話をしてあげよう。私の話を始めるには、私の父と母の話をしないといけないね」

「私の母は乙樽（うとうだる）といって、じつは私と同じようにノロだったのだよ。しかし、ノロの家に生まれた人ではなかった。志慶真（しげま）村という今帰仁城（なきじんじょう）の南側にある集落に生まれた平々凡々な娘だったのだよ。母の家は代々、漁師をやっていて、しかし大変、貧しい家だったそう。母の両親もえらく苦勞をして、母が小さい頃に、流行り病で、二人とも死んでしまった。幼い母は天涯孤独の身になり、それで、このままでは食べていくことができないということで、ある大ノロさまのところに、おつきの者として奉公することになったそうよ」

「この大ノロさまは、樽金（たるかね）さまといって、歳は100歳近い歳だったという。いまのわたしとおんなじだね。とても厳しいひとだったそう。なにしろノロにはいろいろな定めがある。母は漁師の娘で、最初はノロの定めなどわからないから、いろんな失敗をして、ひどく怒られたらしい。しかし、母はなかなかの器量よしだったんだね。そのうち、大ノロさまのおつきの者の仕事を覚えて、誰よりも仕事ぶりがいい。随分と大ノロさまにかわいがられたそう。母はよく大ノロさまに褒められたことを覚えていて、自慢していたものだよ」

「千代や。千代や。お前はいま何歳だい？そうかい。そうかい。13歳かい。もうそんなになるのかい。月日がたつのはほんとうに早いねえ。」

「母の事件も、それは13歳のときのことだったという。ある日、母は大ノロさまに真夜中に呼び出されたのだよ。一体なにごとか？と置いていたら、大ノロさまは、なんと母に『いまから、お前ひとりで海岸にいったって、イラブをとつてきなさい』というのだね」

「イラブは海蛇のことだが、これを捕っていいのは、ほんとうはノロだけなのだよ。普通の人間が捕ってはいけない。しかし、大ノロさまはなぜか母にそのイラブを捕りに行けと命令するのだね」

「もちろん母はおびえたそう。ノロだけに許される行為を、なぜ、単なる普通の人間の、おつきの者である自分に命令するのかと。しかし、大ノロさまの命令は絶対だから、逆らうことはできない。母は二つ返事で引き受けて、真夜中の海にむかって大ノロさまの社（やしろ）をでていったのだよ」

「それは新月の夜のことだったらしい。あたりはとても真つ暗で、しかも海が荒れている夜だった。母は大ノロさまのおつきをやっていたから、イラブの巢のありかを知っている。それは崖の下のイラブガマというところにある。イラブは普段は温和な生き物で、なにもしなければ、かみついたりしないが、一般の人間が、そのイラブガマに手を入れたりすれば、たちまち噛みつかれる。イラブは毒をもっているから、それで大いに苦しんで死んでしまうのだよ」

「母は大ノロさまが何気なくイラブを捕るのを何度も見ているが、それは大ノロさまだからできること。母は自分がやっても成功するとは到底、思えなかった。たちまちイラブに噛みつかれて死んでしまうこと

だろう。しかし大ノロさまの命令だ。逆らうわけにはいかない。母は覚悟して、崖下に降りていき、イラブガマを見つけ、そこにそっと手をいれた」

「また大きい大きいイラブだったそう。母はあんなに大きなイラブはそれ以後、見たことがないといっていた。母は目をつぶりながら、イラブを掴むと、そっと海の中から持ち上げた。不思議とイラブはまったく暴れなかったらしい。イラブは母につかまれながら、そっと魚籠（びく）の中に入った」

「母は、崖の上までのぼり、緊張して、そこで倒れ込んだらしい。ほんとうに死を覚悟しての仕事だった。13歳の娘にはあまりにも酷なことだ。母は気が緩んだのだろう。ちよっと意識を失った」

「次に母が起きたときは、足の付け根に激痛が走ったときだった。母はしまったと思った。いつのまにか自分は寝てしまっていた。それでいつのまにか、魚籠からイラブが逃げたにちがいない。それが噛みついたのだ。しかし違った。母が激痛で眼を覚ますと、そこには大きな影があった。イラブではない。男だったのだよ。母はいつのまにか見ず知らぬの男に犯されたのだ。必死に抵抗したが、無駄だった。相手は凄いい力で、母を殴り、ねじふせられてしまった。母はまた気を失った」

「次に母が目覚めたとき、世界はまっくら闇だったという。新月の夜だからではない。星々も見えないのだ。母は、なにがなにやらわからなかったが、ここには危険だと思い、手探りで杖を探し出し、それをもって歩き出して、なんとか大ノロさまの社についた。大ノロさまはひとこと、静かに『ありがとう。ゆっくりおやすみ』といったそうだよ。その声を聴いて、母は安心して倒れ込み、寝てしまった」

「大ノロさまの社で倒れて、三日三晩、母はすごい高熱がでたそう。死線をさまよったそうだが、奇跡のように息を吹き返した。大ノロさまが、つきつきりで看病してくれたんだね。もう一度、目を覚ましたとき、しかし、母は以前として世界が暗かった。そう。母は男に犯されて、そのショックで目が見えなくなってしまうたんだね」

「目が見えないとなると、もはや大ノロさまのおつきの仕事はできない。母は、見えぬ眼で泣きに泣いたそうだが、そんな母に向かつて、大ノロさまは、『乙樽よ、おまえはもはや、おつきの者ではない。わたしの跡をついで、ノロになりなさい』と命じたのだよ。こうして母はノロになったのだ」

「大ノロさまの修行はそれはそれは大変なものであったらしい。しかし、母は目が見えなくなったことで、いろんなものが見えるようになったという。それまではモノは単なるモノでしかなかったが、母は、モノに宿っている魂が見えるようになった。風には風の魂が。木には木の魂が。光には光の魂が。石には石の魂がある。それが母には、手に取るようにわかるようになった」

「そうして、若いながらも大ノロさまに匹敵するぐらいの素晴らしいノロとなった母だったが、その頃、今帰仁城から使いの者がきたのだよ。」

「当時の今帰仁城は北山王（ほくざんおう）の攀安知（ハンアンチ）さまがおられた。ハンアンチさまは北山王朝の三代目の王で、年齢は五十近い。北山の集落からは優しい城主として慕われていた。しかし南側にいる中山王（ちゅうざんおう）の尚巴志（ショウハシ）さまと揉め事が起こり、優秀なノロを探していたのだね。優秀なノロがいれば、中山王さまの兵隊がいつ攻めてくるとか、どこを守れば戦に勝てるんだとか、そういった予知ができる。最初はハンアンチさまは、大ノロさまに今帰仁城に来るようという命令だったのだが、大ノロさまは、ご自身ではなくて、母を推薦したのだよ」

「母は自分にはとても大役だと思つて辞退したかったが、大ノロさまは、私はもうすぐ死ぬというのだね。だから城に行くことはできないと。そして『乙樽、お前をノロとして育てたのは、今日の日のためだった』といい、母を城に送りだした。母は大ノロさまがとても元気そうなので、もうすぐ死ぬなんてことはまったく信じることができなかったが、大ノロさまがいうことに間違いはない。母は泣く泣く別れて、今帰仁城に入るようになった。母の駕籠（かご）が城についたときに、志慶真村から馬にのつた使者がきて手紙をもらつた。それには母が駕籠にのつて出立してから、すぐに大ノロさまはめまいをおこして倒れて、眠るように亡くなつたと書いてあつたそうだ」

「母が今帰仁城に入ると、中山王の軍勢が国境を超えそうだという報告が入つた。母はさつそく潔斎（けつさい）を行い、御嶽（うたき）で戦勝の祈りをはじめた。これはなかなか大変なものだ。母は大ノロさまが亡くなつて、動揺するかと思いきや、とても静かに、かつてないほどに、祈りを捧げることができたそうだ。やはり大ノロさまがそばにいたときは、心のどこかで大ノロさまを頼つていたのだね。しかし大ノロさまがいなくなると、もはや自分一人で祈りを捧げないといけない。心根（こころね）が違う。そしてこの戦いは大勝利まちがいなしと占いの結果がでた。母がそれを兵たちに告げると、兵たちはとても士気が上がつて、戦場へと出撃することができた。そして、戦は大勝利で終わった。それらの見事な様子を聞いて、声をかけたのが北山王のハンアンチさまだった」

「ハンアンチさまは、母を呼び寄せて、戦勝の祈りの素晴らしさを褒めた。そして、お前ほど美しい女性は見ることがない。しかし、どうして盲目なのだと聞いてきた。母は包み隠さずすべてを話した。元は志慶真村の漁師の娘であつたこと。両親は若くして亡くなり、天涯孤独になり、大ノロさまに仕えたこと。大ノロさまにイラブを捕つてこいといわれたこと。イラブを無事に捕まえることができたが、見ず知らずの男に犯されて、その心痛がもとで失明したこと。それ以後、ノロとして苦しい修行を積んだこと。大ノロさまは母を今帰仁城に送り出し、眠るように死んだこと。大ノロさまを亡くし、また自分は天涯孤独の身になつたこと・・・王はすべてを静かに聞いていた。そして、一筋の涙を流した。母のこれまでの来（こ）し方に、なにやら大きなものを感じたのだろう。立ち上がると、母の前に座り込み、手をとつて、いきなり、母に求愛した。母はあまりに突然のことで驚いたが、王の声は真剣そのものだった。その夜に、母と王は結ばれた」

「もちろんハンアンチさまには母以外にもいろんなお妃がいた。しかし母と王は、仲のいい夫婦であつた。ところが、幸福そうに見える、その次の瞬間に、恐ろしい運命のいたずらというものがある」

「その頃、母の活躍で、敗北を喫した中山王のショウハシさまだったが、まったく懲りていなかった。ショウハシさまは、いざれ北山（ほくざん）、中山（ちゅうざん）、南山（なんざん）と三山（さんざん）に別れている琉球を統一し、ミン（明）やヤマト（大和）に負けない国を作ろうという壮大な野望をもつていたのだ。それに対してハンアンチさまは平和を愛する、優しいお方だ。ハンアンチさまおひとりでは、北山は守れなかつただろうが、しかしハンアンチさまには配下に本部平原（もとぶてい）さまがいた。北山一の武人で、ハンアンチさまのお気に入り、まさに右腕のような人だった」

「ある日、また中山王のショウハシさまが、直々に、北山の国境あたりを攻めてきた。それまでは中山のものが国境に攻めてくるといつても、ショウハシさまの手下のものだったが、ショウハシさま本人が出陣となるとこれは手ごわい。そのときハンアンチさまの命令で、迎え撃つのは平原さまとなつた。平原さまが今帰仁城に呼び出された。戦勝の祈りを捧げるのはノロである母だ。その祈りは神聖なもので、平原さま以外の誰にも見られてはいけない。母の御嶽の社に、平原さまがひとり入つていった。」

「そして、このとき、社の中ではじめてふたりが顔をあわせたのだね。そこで儀式が始まつて、母が祈り

を捧げているときに、突然、直観のようなものが母の中を貫いた。そう。母は気づいたのだ。平原さまが、じつは若き頃の自分を犯した男であったことを」

「母の直観は当たった。平原さまは、北山王に拾われて武将として出世することができたが、じつは、若い頃はとんでもない荒くれ者だったのだ。母は、自分を犯し、失明させた男を許すことができなかった。まさかこんなところで再会するとは……。母は平原さまをなじり、つめよった。平原さまも驚いた。まさか自分の若い頃の乱暴狼藉がこんなことになるとは。しかも相手はいまや王の妃となっている。こんなことがばれたら、大変なことになる。平原さまは母の口封じをしないといけないと思った。そして、二人で争い、もみあっているうちに、思わず平原さまは母の唇を奪った。神聖な御嶽で絶対にあってはならぬことだ。しかし、不思議な興奮がふたりの体をつつみこんだ。いつのまにか母は平原さまに衣服をはぎとられ、裸となり、平原さまは母を抱いた」

「すべてが終わってから、平原さまは、泣きながら、土下座しながら、詫びたという。わたしは王に拾われ、王に育てられた。王は私の父のようなものだ。王に逆らっては生きていけない。死ぬしかない。母はあまりのことで茫然としていたが、平原さまの、その様子に、なんとも哀れなものを感じた。それで許すことにした。そもそも、いまは中山王のシヨウハシさまを迎え撃つことが大事なことだ。それなのに、昔の自分を犯した男を見つけて、思わず我を失ってしまった。これではノロとして、王の妃として、国の母として失格ではないか。これは自分の失態である。平原だけが責められるものではない。母はそう思い、平原さまに中山王さまを夜襲で迎え撃つことを命じた」

「夜襲は中山王さまも想定していなかったのだね。不意をつかれてしまい、戦はこれまた北山の大利であった。城に帰って来た平原さまの先勝の報告を聞いて、ハンアンチさまは大いに喜んだ。しかし母は苦しかった。ハンアンチさまに、夫に、王に、自分は不貞を働いてしまった。しかもその相手は、ハンアンチさまにとって、なくてはならぬ右腕ともいえるべき武人だ。なによりも心苦しかったのは、それから中山王のシヨウハシさまが執拗に責めてくることになり、そのたびに戦勝の祈りを捧げるために、平原さまが母の御嶽に入ってくることだ。そう。じつは二人の仲は、一度だけではなく、それから、何度も何度も続いたのだ」

「北山王のハンアンチさまは、年老いていた。母は若かった。ハンアンチさまは若くして失明した母に憐憫した。母は偉大なるハンアンチ王を尊敬した。それも愛だ。愛だが、静かな愛だった」

「平原さまは若かった。武人で、男らしく、笑うときは笑い、泣くときは泣く。自分に素直で、一直線だった。母を、ノロとか、王妃とかではなく、ひとりの女として愛した。母は平原さまの身勝手を憎んだ。最初は平原さまが戦で死ぬことを祈ったりもしたという。しかし祈りながら、いざ、平原さまが死ぬのを想像すると、怖くなり、自分の中にぽっかり穴があいたような気持になることに気付いた。母は平原の一途さを愛している自分に気づき、結局、平原さまの無事を、戦の勝利を祈願した」

「そのうち、母は妊娠した。ハンアンチさまは大いに喜んだ。平原さまは怯えた。母もどちらの子かわからなかった。十月十日経って、玉のような女の子の乙鶴が生まれた。母は、産んだ瞬間に、平原さまの娘だとわかったという。しかし、それをハンアンチさまに漏らすことはなかった。母と平原さまはふたりだけで話し合い、すべてを秘密にすることを固く誓った。ハンアンチさまは、娘の誕生を国をあげて盛大に祝福なされた。優しい王は、母を信じ切っていたのだ。奇妙な三角関係だった。一步まちがえればとんでもないことになる。しかも、これは13年間の長きにわたって続いたのだ。しかし、その関係も終わるときがきた」

「その年は不吉な年だった。年が明けたと同時に、夜空に真つ赤な星が現れて消え、大雨が続いて、洪水が起こり、その後、日照りが続いた。流行り病が起こり、北山の集落でたくさんの方々が死んでた」

「そのうち、城の中で、妙な噂が流れた。『北山にいろいろと不吉なことが起こっている。これには原因がある。これはノロである王妃が悪いのだ』と。『王妃がなにやらよからぬことをしているせいで、こんなことが起こるのだ』と。その噂はいつのまにか、『じつは王妃にはハンアンチ王の他に男がいる』という噂になった。そして、数日後には『その男は平原さまだ』となり、『王の娘もじつは王の娘ではない。平原さまの娘なのだ』という噂になった。じつはこれは中山王のシヨウハシさまが、ハンアンチさまと平原さまのあいだを裂くための策略だったという噂も聞いたことがあるが、なにしろ昔のことなので、よくはわからない。問題なのは、その噂が、やがて王の耳にも届いたことだ」

「ハンアンチ王は最初は信じなかった。『なにを馬鹿な。王妃は我が妃であり、平原は我が右腕である。そもそも、二人がどうやって密会するというのだ』。そう一笑した。しかし、よからぬ入れ千恵をいれぬものがいた。『いや、王よ。二人だけになるところがあります。中山王が攻めて来て、平原さまが出撃します。そのとき、御嶽で戦勝の祈りをします。あのときだけは王妃と平原さまは二人きりになります』と」

「王はこのときはじめて、ちらつと疑いの念をもった。しかし、そんな入れ千恵をいれる者こそが不届きものであると城から追い出した。『この者は王や王妃、平原を侮辱した。そんなことは考えられない』と断言した」

「ところが、それから王は、日に日に、いろいろなことを考えるようになった。最初は小さな小さな疑いだった。1日に1回、そんなことをちらつと考えた。それが半月もたつと、10回、20回とふえていった。疑いはだんだんと大きくなっていく。いやいや、そんなはずはない。考えすぎだ。考えることをやめようと思った。しかしやめようと思えば思うほど、やめられないのだ。どこか疑わしい。噂はほんとうのように思えてくる」

「そのうち王は、ふと、思った。そういえば、なぜ平原は結婚しないのだ？じつは王は3年ほど前に『平原にそろそろ結婚してはどうか？』と戯れに平原さまに声をかけたことがあった。『戦場ばかりが男の仕事ではない。家を持ち、子を作るといふ仕事もあるのだ』と説いた。そのとき、平原は顔色を変えて『いやいや！王よ！自分はまだまだの人間です。女性など恐れ多い。家を持つなどいってくださるな』といって平伏した。あのときはなにをそんなに慌てて、必死になって否定するのかと思ったが、あのときの様子が、いま思い返すと、どうもおかしいのではないか・・・」

「王はだんだんと陰鬱となった。ちよつとしたことでひどく怒りつぽい。なにをしてもイライラする。まわりにあたりちらす日々。そうやっているうちに、あるとき、ふと閃いた。暗い暗い考えを思いついた」

「王はある日、大事な話があるといつて王妃である母を呼びつけた。母は最近の王の様子に心痛していた。呼び出されたときも、とてもいやな予感がしたらしい。しかし、断るわけにはいかない。何事をいわれるのだろうか・・・と思つていくと、王がやたらと愛想がいい。日に日に王が鬱々していくので心配していた母だったが、今日は安心できそうだと思つた。しかし、いきなり王からとんでもない言葉がでてきた。『王妃よ。じつはわたしに良い考えが閃いたのだよ。平原を結婚させようと思う。相手は我が娘・乙鶴だ』

「母は驚き、狼狽した。平原と乙鶴が結婚する？ 父と娘が結婚？ それでは近親相姦になる。思わず『それはダメです！』と母は叫んでしまった。その様子は尋常ではなかった。王は訝しがった。母に『なぜだ？』と問い詰めた。『普段、お前は平原のことを、これほどの武人は琉球中を探しても、どこにもいないと賞賛

していたではないか。その平原と我が娘の結婚ほど、我が城、我が国の安泰に繋がることはない。なぜそれほど反対するのだ？』・・・母は、言葉につまってしまった。王はその母の狼狽の様子で、ついにすべてを察した。そうか。噂はほんとうであったか。13年間、余をたぶらかしておったのだな、娘は平原の子なのだな、と。暗い復讐に燃える王は、無言の母に問い詰めざるをえなかった。『なぜだ！？なぜだ！？なぜだ！？なぜ平原と娘の結婚を許さぬ！？答えよ！王妃よ！乙樽よ！』

「母は、こうつぶやいた。『平原は・・・卑劣な男です！ 私が眼が見えなくなったのは、あの男のせいです！ 王を苦しませるのはやめようと思って、いままで黙っていましたが、じつは私をはじめて犯した男こそが平原です。そうです。わたしはあの男が憎いのです！』と」

「王はそれを聞くと、すかさず側近のものを呼んだ。そして『平原を捕えよ！』と叫んだ。なにも知らずに邸宅で寝ていた平原さまは、いきなり家を取り囲まれて捕えられ、王と王妃に対する裏切りの罪で、なんの弁明も聞かれずに、ひとことの釈明も許されずに、その場で斬首されてしまった」

「平原さまがハンアンチ王と王妃に対する裏切りの罪で斬首された・・・という知らせは、瞬く間に琉球中に伝わった。これぞ千載一遇の好機であると喜んだのが、中山王のショウハシさまだった。『いよいよ北山を攻め滅ぼすときが来た！』と宣言し、国中の兵を集めて攻めてくる。いままでは平原さまがいたのでなんとかあったが、その平原さまがいなくなると、とてもショウハシさまの勢いにはかなわない。『北山一の、あれほどの忠誠心のある武将である平原さまを、どうしてハンアンチ王は殺したのだ？』と、北山王のご乱心に、配下の者たちの心も離れていく。ついには本場の裏切者が、どんどんと出てくる。やがて今帰仁城はショウハシさまの軍勢に取り囲まれてしまった。ハンアンチさまも、このまま城を枕にするよりは・・・と最後は城を打って出て、壮絶な討ち死にを果たした。こうして北山王朝は滅んでしまったのだよ」

「母は、夫であるハンアンチさまの戦死の知らせを聞いて、天を仰ぎ、城から身を投げて死んだ。ただ死ぬ前に娘の乙鶴にこういった。『娘よ。母は、王はもちろんのこと、お前の父である平原も愛していた。お前はこれから王妃ではなくて、ノロとして生きていきなさい』。そういって、北山王さまの宝剣の千代丸を抜いて、じつの娘の眼を切ったんだね。娘はそれで盲目となってしまった。それから城が落ちて、娘は中山王さまに捕らわれの身となった。しかし中山王さまはこういった。『別にお前は北山王ハンアンチの娘ではない。平原の娘である。さらに盲目となれば、ただの人としても生きていけないだろう。ノロとして生きるのなら、命まではとらない』。そういって逃がしてくれたんだよ。その娘が、私なわけだ」

「おやおや。千代や。千代や。ああ。寝てしまったんだね。まだまだお前はだめだね。しかしだめな子ほどかわいものさ。それにしても長い昔話をしてしまった。長い昔話だが、昨日のことのようでもある。さて、私も寝るとしよう」

今帰仁御神が椅子から立ち上がり、座り込む。蠟燭の灯りを消す。劇終。